二股口の戦い　戦闘経過記録文献について（備忘、後日内容整理）

『南柯紀行』（大鳥圭介）

四月　九日　　官軍乙部上陸

四月十一日　　官軍三手に分かれる

　「甲は江差より松前に向い、乙は木古内間道に進み、丙は大野間道に入りたり、…」

　　　同日？　官軍上陸の報を受けて土方は下（二）股、大鳥は木古内口へ出陣。

「土方歳三は衝鋒隊二小隊、伝習二小隊を師いて、市の渡口下股へ出張、…」

布　　陣：土方歳三・大川正次郎、衝鋒隊二小隊・伝習隊二小隊

　「但し此兵隊中の一小隊は、昨十二月末より箱館にて募りたる生兵なりければ…」

四月十三日　　官軍襲来（第一次会戦）　襲来時刻言及なし

　　官軍軍容：「官軍先鋒長州、福山、松前、薩州兵隊几五六百人襲来り」

　　胸壁造営：「同地にては已に胸壁を要地に築立置たれば、之に拠り防戦す」

　　戦闘経過：「敵方も新手を入替え襲撃し、味方も二小隊ずつ交番に急速して、防ぎ戦うこと凡そ十六時間にして、翌十四日朝七時に及び、敵引退きて稲倉石に帰れり。身方も徹夜の長戦にて頗る疲労したれば、長追を止めて急速せしめたり、此戦前日より始まりて、翌日に続きたれば何れも憤発して防禦し、兵士中にて千発余は発射せし者あり、少なきものも三四百発は打ちたるにより、兵士の顔硝煙に触れて、崑崙奴の如くなりたりとぞ」

　　戦果死傷：「此時身方の死傷七八名、敵方の死傷は詳ならざれども胸壁も無ければ五六十人は必ず有りたらんと察せり。」

　　備　　考：箱館において募兵した小隊も奮戦。敵中に突撃し二人を斃したあと戦死するなど、「兵は新故にあらず、其訓練の精粗にあること明なり」と大鳥らを驚嘆させている。記述の内容的に弥三郎か。

四月十四日　　朝七時　官軍撤退（前述・十三日戦闘経過参照）

四月二十四日　官軍再襲来（第二次会戦）　襲来時刻言及なし

　　官軍陣容：「敵軍又二股口に襲来す、其兵は薩州、福山、津軽の勢なり」

　　布　　陣：「身方は伝習兵二小隊、同士官隊にて之を防禦し」

　　戦闘経過：「先頃の如く本日二時頃より夜二時頃に至りき砲声不止、敵軍又稲倉石に引揚げたり。」

四月三十日　　早暁、矢不来陥落の報を受け二股撤収

　「矢不来已に敵の有となる上は、二股の方も援路絶え、加之（しかのみならず）後より敵を受くる患

　　あるを以て、翌三十日早暁胸壁を棄てて、兵隊皆な五稜郭に引揚げたり」

『蝦夷之夢』（今井信郎）

四月九日　　　官軍乙部上陸

四月十日※　　午後三時頃　官軍襲来（第一次会戦）

※同じ今井の手による『衝鋒隊戦争略記』では十三日とあるのでおそらく日付誤認か誤写

※文中初出は十日午後三時であるが、同文十三日の項に「十二日第三時より今朝第七時まで…」との記述がある。十日・十三日の二つの項に分けて書いてしまっているため日付に大きな誤謬が生じているが、いずれも第一次会戦に係る記述とみてよいと思われる。

布　　陣：土方歳三、吉沢勇四郎、今井信郎衝鋒隊（二小隊）、伝習隊一小隊、中根豊三乙兵隊

　　　　「また、二股口にては衝鋒隊、伝習隊合せて纔かに百三十人にて、…」

　胸壁造営：「嶮に拠り壁を十六ヶ所に築き、また天狗岩に胸壁四ケを築きて敵の寄するを待つに、…」

　官軍軍容：「敵大挙（薩、長、福、松前）」

　戦闘経過：「敵大挙（薩、長、福、松前）進み来りて天狗岩の壁に迫りおおいに戦う。吾兵且つ戦い、且つ引き敵を嶮にいざない、かねて築きし十六ケ所の壁より十字に射撃す。敵兵また死憤の勇を発し死人を楯にとりて悪戦す。」

　　　　　「夜に至りて大雨滝のごとし。彼は兵を入れ替え入れ替え戦う。我は三小隊に十六ケ処を守り、代る可兵なし。急に彼を破らざれば支うること能わざるを謀り、決死の兵を選び

衝鋒隊半小隊（頭取友野栄之助）夜十時頃、沢を渉り山を攀じ、彼の横背に出でて暗中より喇叭を吹きかつ乱射す。敵兵不意を撃れ驚潰乱走し『テンツ』および器械を捨て去る若干（此の時東方已に白む）。」

　　　　　　「十二日第三時より今朝第七時まで、およそ拾七時の烈闘に我費すところの弾薬ほとんど三万五千余発にして、ますます精神を静め、狙撃することはなはだ多く、敵軍ふたたび自ら敗れ死傷を担いて退く」

　　戦果死傷：「この役死傷伝習隊士官板山清助外銃兵三人巳（のみ）。敵の死傷はなはだ多く、満地の草木鮮血に染まり、「スヘンセール」「スナヰトール」等の元込赤銅「パトローン」の空、積りて山のごとし。」

四月二十三日　官軍再襲来（第二次会戦）　襲来時刻言及なし

　「二十三日、敵軍再度の恥辱を雪がんと思いけん。衆をつくし深霧に乗じ二股に進み来る。」

戦闘経過：「吾番兵草木の蔭に潜臥し、敵を四、五間に引付け数十人を狙撃す。これを戦の始にして、敵兵潮のごとく競い来り、殪者を踏み越え、兵を繰り替え繰り替え猛烈に発放なす。飛弾は五月雨より繁く砲声山谷に震う。しかれどもこれを戌るの兵は戦場に訓れたる精兵なれば（衝鋒隊三小隊、伝習隊三小隊）、ここに顕れかしこに隠れ千変万化、勇を振って防戦なすこと一昼夜、毫髪の休期なく敵を射撃なせしも我兵労を覚えず。敵の殪死者麻のごとく、流血渓水を染む数十町。」

四月二十四日　午後二時頃　滝川充太郎率いる伝習士官隊の救援

戦闘経過：「二十四日十二時頃、滝川充太郎伝習士官隊（一中隊）を駆って箱館より馳せ来り、敵の撓むを見、鞭を揚げ接戦の令を伝う。一中隊を円陣に備え、壁を躍り踰え雲霞のごとき敵軍に衝き入る。遠藤銀之助（嚮導役）、小田練次郎、林寅之助等即殪死するを顧みず、銃槍をもって敵を衝き崩し渓水に追い落す。是を見、敵将剣を振い退者を斬って励し、おおいに兵を叱咤し山腹より取って返すを、我兵撃ちて殪す（この人二十二、三歳にて好き人品なり。ある人言う、長藩にて官の軍監駒井浅五郎なりと）。これに続きて大軍返し来り、我兵退きて壁に入って休す（この時、大川正二郎おおいに滝川の暴動を叱る）。」

　　　　「敵また兵をますます加え、壁に迫ること七、八間に至る。我兵心を慎め目的を定めて狙撃す。されども銃の熱すること火のごとく、提操するを得ず、冷水をもって洗い清む（衝鋒隊は、銃に薬カス溜り尖弾の入らざる時は青草を取りて筒中に挿入発火す。しかる時はカスを洗い去ること、水にて洗うと同じという）。」

四月二十五日　黄昏　新政府軍決死隊による奇襲、大川正次郎による督戦

　　戦闘経過：「敵は死傷多きを怒り、二十五日黄昏、敢死の兵を選びて路なき嶮山に攀じ登り我背に出、山上より眼下に乱射し、喇叭を吹き鯨波（とき）を揚ぐ。我兵本営に有る者傷を受け、全隊驚き崩れんとするを見て、大川正次郎剣を右に提げ左に冷酒を携え笑って兵に対し曰く、汝輩地に座しこの酒を飲み、敵の自ら殪れるを見物せよ。本道の我隊もはや彼の背後に出んとす。汝輩退きて他人の嘲りを受くることなかれ、と。ここにおいて伝習、衝鋒の二兵、ことごとく地に踞し、かつ飲みかつ射し後を観る者なし。かくのごとく二時余、敵軍おおいに屈し前面の兵先ず崩れ走るを見、山上の兵また狼狽したちまち崩れ散々になりて走る」

戦果死傷：「この役二十三日より同四日まで（※二十四日から同五日までの誤り）昼夜の烈戦、我兵死者わずかに九人、須田金次郎、高橋巳之吉、山本善吉、滝野弥太郎を初め傷者十七人。渡島以来この戦をもって第一の烈戦という」

四月二十九日　夕刻　矢不来敗れるの報が届く。これを受けて二股撤収。

　「この夕、二股口には矢不来破れ、敵軍有川に進むの報告を得、諸長会議し、敵已に背後に出、ただちに五稜郭に迫る。我輩ここを守るまた何為（いか）にかせんと、諸処の塁壁の器械を纏む。また敵の寄す可き道路、胸壁中等に地雷火を伏せ（敵これに当りて多く死傷すと後に聞く）、粛々列を正し神山大川村に退き所々壁を築きて戌る。」

『衝鋒隊戦争略記』（今井信郎）

四月九日　　　官軍乙部上陸

同日以降　　今井信郎、二股にて情報収集。土方ら軍議し、二股胸壁造営および迎撃を議決。

「時ニ今井信郎中隊ヲ率、峠新道ニ塁ヲ築テ有シカ、稲倉間道ヨリ（※官軍が）競進ト聞、中隊ヲ一ノ

　渡村ニ転陣シ、小隊ヲ二股ニ進、土人ヲ招集シ地理ヲ推問ナス所ニ、陸軍奉行土方歳三、仝添大野右

仲、工兵頭吉沢勇四郎等来テ議決シ、二股ニ塁ヲ築、我中隊（※衝鋒隊）ヲ以戌ル。」

四月十三日　　早朝　官軍、天狗岩に襲来（第一次会戦）

　「十三日暁、天狗岩ニ備シ守兵、南軍襲来ノ旨ヲ報ス。」

布　　陣：衝鋒隊中隊（頭取：友野栄之助・川井卓郎）・伝習歩兵小隊・砲兵・工兵　百三十人

胸壁造営：数十ケ所

　　　　　　「於之二股ノ嶮ニ築シ数十ケ所ノ胸壁ニ我中隊頭取（友野栄之助、川井卓郎）、伝習歩兵小隊、砲兵、工兵合セテ百三十人、伏テ敵ノ迫ツクヲ待。」

戦闘経過：「南軍、天狗岩ノ守兵ヲ破、勝ニ乗ジ競進。我兵益々怯ヲ示シテ不動。其間数十間ニ迫ツク時、銃先ヲ揃テ狙撃シ、真先ニ進タル騎兵ヲ撃落ス。敵兵驚テ崩、是ヲ乱射シ散テ不追。敵又返来、発放ス。我兵又応シテ狙撃シ、夜半迄勝敗不決。」

　　　　「友野栄之助、半小隊ヲ率、渓ヲ渉、嶮山ヲ攀、敵背ニ出、未及南軍激走、我兵追撃シ打取、分捕尤多シ。」

四月十四日　　見国隊（仙台脱藩）合流。うち二中隊が二股口に増援。

　「我総督（※榎本武揚）、見国隊ヲ指揮シ、海岸所々ニ備シメ、酒井兼三郎、秋山繁松二中隊ヲ率セ二股口ノ援兵ニ出ス。」

　「二股口ニテハ大川正二郎（伝習歩兵隊頭並）中隊ヲ率来、援ケ合テ六小隊、同分小隊ヲ河汲沢ニ備、二股右山上、正面トニ伝習隊、左山上ニハ川井卓郎小隊ヲ以守、川傍ニ友野繁ノ助小隊ヲ以守ル。」

四月二十三日　四時ごろ　官軍再襲来（第二次会戦）

　「廿三日四時頃ヨリ南軍襲来テ戦。」

同会戦中　　滝川充太郎の増援

戦闘経過：「瀧川充太郎（伝習士官隊頭並）中隊ヲ率、援来テ南軍ノ撒漫スルヲ見、大言シテ敵ヲ見テ不進ハ不勇士ト、真先ニ馬ヲ躍セ敵陣ニ馳入。是ヲ見、中隊ノ士、尽釼ヲ奮テ斬入、追崩ス。敵ノ別隊、右手山上ヨリ猛撃ニ射撃ス。瀧川、兵ヲ叱咤シ憤戦。死傷多、又元ノ山ニ追返サル。」

　　　　「我兵伝習隊ト力ヲ限、十字火中ニ敵ヲ射殪ス。去ドモ敵兵死骸ヲ楯ニ取、激戦不撓、一歩モ不退、廿五日夜半迄血戦。我兵ノ益々盛ナルヲ見、次第ニ退。」

四月二十六日　早朝　官軍撤退

　「廿六日暁、尽退去。」

四月二十七日　二股口に増援。

　「廿七日、今井信郎、浅井陽中隊ヲ率、大野村ニ来テ本隊ニ合シ二股ニ向。」

四月二十九日　夜九時前　矢不来敗れるの報を受け二股撤収

　「二股口ニテハ矢不来破テ、南軍有川ニ進ノ報告来。諸隊長議ヲ決シ、三ケ所ニ地雷火ヲ伏、夜九時前、二股一ノ渡ノ営ヲ抜、先鋒伝習隊（大川正次郎）、中軍土方歳三、伝習士官隊（瀧川充太郎）、殿軍衝鋒隊（古谷佐久左衛門、今井信郎）粛々列ヲ正シ退テ赤川、神山ニ陣ス。」

『新開調記』（地元住民による日記）

四月十四日　　第一次会戦について言及

　「十四日　官軍は江差より新道え出、鶉村、笹小屋村より押寄るよし五稜郭え早打参候に付、早速仙台額兵隊、新選組幷一聯隊、伝習隊、杜陵隊其外運上所、沖之口役人繰出し、官軍追々二タ又村迄参候へども、猶笹小屋迄引退、双方見合居る。」

四月二十五日　第二次会戦について言及

　「扨又二タ又村、笹小屋村に戦争三日三夜あり、伝習士官隊百五十人相帰、地雷火に当り手負、死人も有之、大野え手負廿人来る。」

『説夢録』（石川忠恕、吉田脱藩・蝦夷政府江差奉行調役）

四月十二日　　第一次会戦について言及

　「十二日、…（中略）此口又二た俣の間道へ敵軍薩長を始めとし強兵を撰び、六百余人松前藩を嚮導とし進み来て我が胸壁に迫る。我が伝習隊・衝鋒隊・砲兵隊・工兵隊合て二百余名壁を守り、互に大小砲を猛発し精力を尽して激戦す。此日午後三字頃より始て、翌十三日夕景迄昼夜の間断なく砲戦し、更に勝敗の色見へざりしが、遂に敵兵力屈せしや退き去る。此役我が創する者数名のみ。敵の死傷は知らず。此戦ひ我が費す弾二万五千余発に及ぶ。敵は専ら「スヘンセル」を用しと見え「ドース」の空夥しく樹の下或は地上に散布せり。」

四月二十三日　第二次会戦について言及

　「二十三日二た俣口の胸壁へ敵敗死の兵を募り来り攻撃す。我前の如く壁に拠て応戦す。敵百計力を尽し苦戦すれども抜く能はずして遂に退き去れり。此役や敵必らず二た俣を破り、直ちに五稜城に迫らんと期し奮戦必死を極む。我が兵も亦之を察し壁に拠りて動かず、力を尽して防戦す。」

　「敵壁の破ぶる可らざるを知り、翌二十四日強兵を撰び深谷を穿ち厳嶮を攀ぢ我が壁の左り向ふの山に上り、小銃を放ち突然後を破らんとす。我兵動かず、忽ち一隊を分ち迎ひ撃て之を走らす。此時伝習士官隊憤激し壁を出て刀を揮ふて敵中に切り入る。此に於て両軍互に死力を尽し弾を惜まず、戦ふこと殆んど二昼夜。敵我壁の益す、固くして抜く可らざるを察し、二十五日午前兵を解去る。」

　「此役官軍参謀駒井静五郎弾を負ふて斃る。其他諸隊の役員戦死多く、負傷者も亦夥しと云。依て敵軍僅の兵を此に残し置、余は尽く引て木古内の兵と合すと故に、爾後復此に大挙して攻め来らざりし。」

　「此役二昼夜間断なく砲戦せし為め、我が弾を費すこと三万六千余発に及ぶ。戦死する者、砲兵隊石川周司（差図役）・伝習士官隊遠藤森蔵（差図役下役）・同歩兵隊杉山清助（同）・石川益太郎（同）・其他兵卒数人負傷者も亦数人なり。」

四月二十九日　二股口撤収について言及

　「此夜二た俣口へ出兵の我軍矢不来の敗軍を聞き、後を絶れんことを恐れ兵を纏めて五稜城に引揚ぐ。此の退き口に胸壁外に踏落の地雷火を仕掛け置たりしが、退て遥か後ろに発声あり。之を顧るに黒煙天を突て騰れり。敵之れが為め必らず死傷ありしならん。」

『北洲新話』（元彰義隊士　丸毛利恒）

四月十二日？　第一次会戦について言及

　「偖又二股口には陸軍副都督土方歳三、衝鋒隊（二小隊指図役頭取（※友野栄之助・小和野昌太郎））・伝習歩兵隊（一小隊指図役頭取中根量三）を将ひて出張し（十日）、下二股を本陣とし、山上嶮を取て胸壁十六処を築き（春来築きしもあり）、又上二股（下二股より一里半）の山上に壁四ケ所を構へて此を守りしに、此日午後三時頃より敵大挙（薩・長・福山等の兵六百人許）して二股に進撃し来り、我上二股の壁（衝鋒一小隊）と大に戦ふ。敵山を廻り我が壁を目下に射撃す。我兵支ること能はず、山を下りて退く。」

　「敵急に進んで下二股に逼る。我兵十六の壁に散りて是を防ぎ、縦横乱射す。此夜大雨殊に甚しく我兵尤苦戦す。半小隊を分つて（夜第十時頃）沢を廻りて彼の横を連射す。天漸く白して戦ひ猶止まず。」

四月十三日　第一次会戦続報

「茲に二股方面にては土方歳三、衝鋒隊・伝習歩兵隊、纔に百三十余人を以て前日第三時より今朝第七時迄凡十七時間の烈闘、我兵益々精神を励して防戦す。因て敵は空しく死傷のみ多して遂に抜くこと能はず、怯れて退かんとす。我兵急に追ひ撃て之を破る、捕獲頗る有り（此役我が死する者、伝習の士官杉山清介、其他死傷とも僅に三、四人。而して我が費す所の弾薬殆んど三万五千発余に及ぶ、総じて彼の兵は多くスヘンセール・スナイツル等、元込の銃を用へり、而して我兵はミニー銃を用ふ）。」

四月二十三日　第二次会戦への言及

　「二十三日大軍を以て敵又二股口に侵襲し来る。我伝習歩兵隊（二小隊歩兵頭並大川正次郎）・衝鋒隊（二小隊差図役頭取酒井兼三郎・小和野昌太郎）等是に当りて防戦す。敵兵を入替へ繰代へ急に撃つて抜かんとす。我又死を以て之を戌る。因て使を五稜郭に馳て援を請ふ（已にして土方歳三来る）。」

「二十四日天未だ明けざるに五稜郭より滝川充太郎（歩兵頭並）、伝習士官隊（二小隊函館を戌りし兵）を将ひて此に来りて兵を合し、直ちに壁を躍り超えて敵陣に殺入す。遠藤銀之助（嚮導役）・小田練次郎・林寅之助（士官隊）等死す。我兵顧みずして進む。敵屈して山道へ退く。此とき彼の軍監（此人三十二、三歳にして好き人表なり。或は伝、長州駒井政五郎なりと）と見へ、両三人を従へて傍の山上より逃る味方を叱して進み来る。我兵打て斃す。已にして大軍返戦し来る。我兵退き壁に入つて之を防ぐ。」

「敵は益々大兵を以て新手疲るれば又新手を入替、死傷の多きも顧みず一時に攻潰んとす。我も又三百有余の兵死力を出して発砲せしかば、各々銃に熱を生じ持つこと能はず、為に桶やうの物に冷水を貯へ四、五発にして銃を冷し、代々（かわるがわる）に弾を込め如此（このごとく）するもの殆んど二昼夜、両軍の砲声は山谷に響き天日も是が為に闇く、飛弾は空中に撒乱して恰も狂風の雪を吹が如し。而して戦争些も絶る間なし。」

四月二十五日　第二次会戦続報

　「二十五日二股口にては前日より昼夜の烈闘敵怒て敢死の兵を撰み、深谷を穿ち絶嶮に攀て、突然と我が左りの峻山に上りて我が横に向つて連放す。我兵顧みず奮戦、敵遂に勝可らざるを知って退き去る。」

　「此役や二十三日より二十五日まで昼夜の間にて我兵死する僅に九人、士官隊の須田金次郎・高橋巳之助・山本善吉・滝野弥三郎を始め傷つく者十七人、敵又死傷百余人と云ふ。茲に歩卒に弥三郎と云ふ者あり、銃槍を揮て敵中に躍入、二人を殪して討死す。後ち其尸を見しに耳鼻をそぎ眼を繰出され居たり。是れ松前藩の為す処と其残酷怨むべし。」

四月二十九日～三十日　二股口撤収

　「茲に又二股口を戌りし土方歳三の一軍（伝習歩兵・衝鋒・伝習士官等の数隊）は矢不来已に破れしかば、其の帰路を絶たるゝを慮り、尽く兵を五稜城及び函館に引揚ぐ（此の路、自雷火を埋めおきしに、後ち敵是を踏んで死傷数人ありと云ふ）。」

『苟生日記』（杉浦清介）

四月十四日付　フォルタンよりブリュネへの書簡の訳文

「十四日附二股詰諸人ホルタン、ヨリブリユネ宛書簡翻訳写　左之通

一、十六時間之戦ヒ、今朝第六時敵勢立退申候、此立退シ訳ハ、味方弾薬乏シク、敵モ亦同様タレバナリ

一、衝鋒隊薄手負五人、下等士官一人、尻ヨリ脚ヲ打抜レタリ、然レトモ歩行ヲ得ベシ

一、伝習隊下等士官一人戦死、手負一人

一、敵之死傷相分ラス、然トモ我ハ胸壁アリ、彼ハナキヲ以テ其死傷推量スヘシ

　味方之働キ驚ク可シ、一人ニテモナマケルモノナシ

　味方ノ人、其顔ヲ見ルニ、火薬ノ粉ニテ黒クナリ、恰モ悪党ニ似タリ

　　　　四月十四日六時十五分

二股ニテ

ホ　ル　タ　ン

ブリユーネ君」

『蝦夷錦』荒井信行（仙台脱藩額兵隊）

「海軍両度戦争並ニ二股口合戦之事」

　「是ヨリ先、二俣口ノ間道ヘハ土方歳三ヲ大将トシテ、伝習隊三小隊・衝鋒隊二小隊・砲兵隊・工兵

　　隊、都合三百余人ニテ固メケルガ、四月十二日敵軍松前藩ヲ案内トシテ、薩長二藩ヲ始メ強兵六百余人、昼八ツ時頃攻来リテ小銃ヲ放ツ。我軍十六ケ処ノ強壁ヲ構ヒ、其夜ハ戦ヒ、翌十三日夕景ニ至ルマデ、吾兵纔ニ五小隊ニテ三万五千ノ弾薬ヲ費セリ。敵ハ専ラ七発ノ精鋭ヲ以テ攻ケレ共、吾ガ軍、嶮ニ拠テ防ギシ故、敵一里程引退ク。此時参謀駒井浅五郎戦死セント云。」

　「同廿二日敵強勇敢死ノ者ヲシテ又来リテ二俣ヲ攻ム。吾兵先ノ如ク胸壁ニ拠テ防戦ス。敵百計力ヲ尽シ苦戦スト雖モ、抜ク能ハズシテ終ニ退キ去ル。此役ヤ敵必ズ二俣ヲ破リ、直チニ五稜郭ニ逼ラント欲ス。故ニ奮戦必ズ死ヲ極ム。然ルニ吾ガ兵胸壁ニ拠リ死ヲ極メテ防戦ス。」

「敵此壁ヲ破ルベカラザルヲ知リ、同廿四日強兵ヲ撰テ深谷ヲ穿チ、巌嶮ヲ挙テ突然我ガ陣ノ左山ニ登リ、小銃ヲ放ツテ後口ヲ破ラントス。吾陣ヨリ胸壁ヲ越ヘ、伝習士官隊刀ヲ抜キ敵軍ヘ切入リ、遠藤森蔵等血戦シテ死ス。互ニ入乱レ昼夜攻メ戦フ。然レ共敵ハ終ニ此ノ胸壁ヲ抜ク事能ハズ、兵ヲ解テ去ル。」

「兵ヲ分テ此ノ地ヲ押ヘ、余ハ悉ク木古内ヘ廻リテ合兵シ矢不来ニ到ル。此ノ時吾ガ兵戦死陸軍奉行添役忠内次郎三・砲兵隊差図役石川周司ヲ始メ十余人ナリ。敵ノ死傷頗ル多シト云。」

「此ノ後同廿九日矢不来ノ吾軍破レ、有川・七浜等悉ク瓦解シテ、五稜郭ニ退キタル由報告有リ。依之土方歳三悉ク兵ヲ退ソケ帰ル。此ノ退キ口ニ踏折ノ地雷火ヲ装置セシガ、遥ニ退テ後ヘニ発声アリ。是レヲ顧ルニ黒烟天ニ立騰レリ、是レガ為メニ敵必ラズ死傷多カラント云。」

『戊辰戦争見聞略記』石井勇次郎（旧・桑名藩士、会津→仙台→箱館新選組）

「是ヨリ先（※四月）十二日、彼レ江刺ヨリ新道ヲ進テ二タ股村ニ迫ル函館ヘ出ル間道也。是ヲ守ル我軍、伝習士官一小隊、衝鋒隊三小隊、合僅二百人余也。敵ハ薩、長州、備（※州）ノ福山、松前、備前、合テハ六藩、人員五百余ト言。爰ヲ以テ屢攻ム。我軍嶮地に胸壁ヲ築テ泰然トシテ守ル。又五稜郭ヨリ一小隊ヲ以是ヲ援ク。軍気益振フ。敵屢攻ムルト雖、我軍地理ヲ得ル。且土方君将タレハ能機ニ応シ勉強シテ防ク。彼レ只死傷スルノミ。」

「然ル二十四日、敵大軍ヲ以テ奮戦ス。我兵殆ト敗セントスルヲ以テ奮発接戦ス。此役二日三夜ノ大戦遂ニ敵軍ヲ破リツ。」

「同廿二日（※二十九日の誤り？）有川村ノ方面戦不利ニシテ遂ニ敗走ス。此方面敗スレハ二股口モ守ル不レ能、遺憾ト雖止ヲ得ス遂ニ引揚ル。然ルニ敵、我厳整ナルヲ見テ敢テ尾撃セス。故一人モ損セス。又寡ヲ以大敵ニ当リ動カサルハ是土方君ノ力也。」

『函館戦記』（彰義隊員某、同名の大野右仲による著書とは別）

　「此日（※四月十三日）第九字ヨリ十三日（※十四日の誤り）十字迄、二股口大戦争。官軍ハ薩・長・津・松前等ノ兵六百人余。我伝習隊三少隊、壁ニ拠テ狙撃スルコト已ニ三日。敵終ニ敗績ス。退クコト半里、此役ヤ長州ノ軍監何ノ某ヲ討ヲ、敵ノ殺傷数知ラズ。身方八人討ル。土方歳三此ノ方面ノ督タリ。」

「此日（※二十三日）我二股ノ壁エ敵大挙シ来ル。我カ伝習士官隊・衝鋒隊ヨクコレヲ防ク。敵ノ死傷最多ク、我兵死スルモノ僅ナリ。廿五日ノ暁迄連戦、ツイニ抜クコトアタワスシテ去。」

『中島登覚え書』（中島登、新選組）

　「同四月初旬ヨリ所々エ胸壁ヲ設、厳重固居ル。同九日官艦八艘ノ由乙部村エ上陸旨注進有之。依之土方公江差二タ股口エ伝習四番小隊衝鋒隊ヲ率テ出陣ス。此時大野古（※「右」の誤り）仲大鳥某（※「大島」の誤り、大島寅雄）大畠某等従フ。既ニ二股ニ到ル。厳ニ番兵ヲ附置。」

「土方公一ノ渡村宿陣。同十三日夕七ツ時敵兵四百人余押来ル。直ニ大戦ニ相成リ、同十四日朝五ツ時頃敵敗レテ逃、味方大勝利ニテ分捕数多有之。同十六日夜襲来ル。味方又ゝ勝利也。同十七日、戦ケレトモ又候前同様也。同廿三日夕七ツ時ヨリ敵兵千余人ヲ以テ打来ル。直戦争ニ相成、同廿五日朝五ツ時迄寸時モ休ミ無ク互ニ発炮シケレハ、敵兵追ゝ崩立遂ニ敗走ス。是ヨリ半隊ツヽ一ノ渡エ引揚休陣ス。兵隊一同エ賞美並酒肴ヲ被下。」

　「…於是榎本松平両公騎兵ヲ以土方公ニ（※矢不来敗戦・撤退すべき旨の報を）送。公見之テ直様二タ股川汲沢出兵の面ゝエ書状を使シ、一ノ渡リ迄急速可引揚ノ令ニ依、兵隊不残器械弾薬米粮等取集、夕刻一ノ渡迄引揚…（中略）…同五月朔日五稜郭ニ帰陣…（後略）」

『島田魁日記』（島田魁、新選組）

　「此日（四月十三日）官軍間道ヲ進ミ険ヲ踰テ二股地名ヲ襲。我衝鋒隊、伝習歩兵二小隊二股ヲ守ル。総督土方歳三常ニ市渡地名ニ休ス。亦二股ノ地形ヲ相スルニ、道山ヲ挟ミ左右ヲ擁シ、右巓ニ登レハ樹木茂シ、旁左巓ニシテ下レハ、河流有リ、水深シテ歩渉シ難険地ニ壁ヲ築ク。十一河岸に築ク。三広メ大ナル者二道ヲ狭シテ築ク。天狗岩（岳）ヲ守ル一小隊。」

　「然ルニ官軍来リ直ニ銃ヲ放ツ。我軍壁ヲ守テ銃ヲ放ツ。総督直ニ馳来リ諸営ヲ戒ム。皆来リテ戦ヲ挑ム。既ニシテ天狗岩（岳）敗ス。官軍乗シテ臼炮ヲ放ツ。我壁皆銃ヲ放ツ。馳驟疾風雨如キ者ハ長藩、剽悍死ヲ畏レサル者ハ薩藩。」

「我壁多クシテ兵少シ。唯河岸ノ三壁ニ精鋭ノ兵ヲ伏シテ不動。日没天俄カニ暗シ。忽ニシテ黒雨戦卒皆戎衣ヲ脱シテ弾薬筥ニ蒙ラセ雷管湿テ不発、皆懐ニス。官軍壁下ニ薄リ是ヲ攻ルト雖我軍不動。夜将ニ五更官軍撓色無シ。」

「総督曰ク、官軍ハ士ニシテ衆、我軍ハ歩卒シテ寡、力ヲ以テ争難シ。総督謀事ヲ以テス。死卒廿五人ヲ募シ水ヲ游河ヲ渉リ険山ヲ越シテ官軍ヲ襲シム。日已ニ昇天ス。官軍忽チ敗走ス。我軍僅ニ百三十人。総督法令厳整ニシテ善ク士卒ノ心ヲ得ルヲ以テナリ。官軍猶天狗岩（岳）ニ陣ス。」

※以下、十四日の出来事とあるが第二次会戦緒戦（二十三日）との混同か？

「十四日官軍亦二股ヲ襲。険嶺ヲ越シ稲倉石地名古間ニ出ル有。人蹤無キ五十年、官軍土人ヲ以テ嚮導ト為シ軽装シテ来ル。夕日西映炊烟漲キリ上ル。衝鋒隊頭取酒井兼三郎兵ヲ率テ官軍ノ営ニ望ム。然ルニ官軍前嶺ニ登ル。或ハ樹木ノ間二馳驟シテ銃ヲ放ツ。然レ雖敢テ不進。兵亦不多。我伝習歩兵隊長大川正二郎兵ヲ率テ戦フ。官軍夜ノ闌ニ従ヒ漸うニシテ憎シ、五更ニ至リ八百人ニ下ラス。我軍河汲沢市渡地名ニ休スル者皆来リ援フト雖三分ノ一ニ不足。我軍甚タ労ス。総督能ク機ニ応シテ防ク。東方正明ナリ。」

「伝習士官隊長滝川充太郎、戦急ナルヲ聞テ二小隊ヲ率テ筥館ヨリ馳来リ、直ニ巓ニ登リ馬ニ鞭打先ニ進ム。其隊皆刃ヲ抜テ是ニ随フ。山下ノ官軍敗巓ヨリ銃ヲ放ツ雨飛ノ如ク、充太郎仰テ登ル不能シテ退去ス。」

「時ニ一人ノ歩卒身ヲ踊テ後ニ随ヒ行ク。然ルニ一人ノ士来ル。見ルニ官軍ナリ。直ニ銃ヲ放ツ。胸ニ徹シテ死ス。直ニ面皮ヲ剥キ目ヲ抉ク。見ル者正視ヲ不忍。正二郎面色怒ヲ屓充太郎ニ謂、君何ソ策無ヤ、徒ラニ殺傷シテ軍気ヲ摧ク。軍総督ノ命有ヤ。充太郎黙シテ不答、其心ヲ悔ム。然ルニ総督来リ謂、大川子（氏）ノ言固ヨリ理有リ滝川子（氏）ノ勇亦可感シ。」

「営傍河ヲ隔テ陣ス。此戦十四日申ヨリ十五日未ニ至ル。」

「廿三日官軍二股地名ヲ破ラント欲シ、烟リヲ挙喇叭ヲ吹声波浪ノ激スル如ク忽ニシテ官軍前嶺ニ登リ、頻ニ鉄炮ヲ放ツ。挟攻ヲナス、我軍色動ク。総督土方歳三山巓ヲ陟降シテ諸壁ヲ戒ム。総督謂、官軍後ロヲ絶チ則チ烟挙喇叭吹シテ潜ミ進ム、我軍ヲ懼レ走ラシ〆ント欲ス。諸子駭勿カレ且退ク者在レハ是ヲ斬ル。官軍ハ謀事不成ヲ知リテ止ム。」

「日没ニ及戦愈烈シク然レドモ我兵少ナクシテ壁多シ。官軍攻ル所ニ従ヒ能ク禦ス。亦官軍撓色無シ。東方正ニ明ナリ、天ニ点雲無シ。両軍戦ヒ数刻ニ及ト雖勝敗ヲ決セス。険嶺ヲ越シ或ハ渓水ヲ渉リ、壁下ニ薄リ銃ヲ放ツ。両軍斃テ不撓臼炮ヲ放ツ雷激ノ如ク、細丸雨飛ニ似リ。夕日西陽官軍少シク疲ル、忽ニシテ敗走ス。我軍敢テ不進。」

「総督自カラ樽酒ヲ携諸壁シテ兵ニ贈リ謂、汝等ハ歩卒ニシテ能防リ、官軍ハ士ニシテ且衆、吾常ニ賞嘆ス、且汝等戦幾許ソ日五十回ニ下ラス。汝等牧野駿州公治下妙見山ニテ風雨ヲ侵シテ戦フ。五日夜其烈シクシテ久キハ奥羽越ノ三州ノ戦ヒ此ニ過ル無シ。今日ノ戦ヒ汝等ヨリ見レハ児童ノ戯ナリ、吾重賞ヲ与フ。然レドモ酔ニ乗シテ軍律侵スヲ患、只一椀ヲ与フ而已。皆喜笑シテ自カラ勉ム。」

「然ルニ官軍亦直ニ来リテ臼炮ヲ放ツ。近キハ則相距二百歩、遠クシテ五百歩ニ過ス。戦ヲ排ム。日已ニ昇天、官軍潜ミ潜ミ壁下ニ薄ル。亦斃レテ撓ム色無シ。我軍数危シ然レドモ官軍亦疲ル。我伝習士官隊数人刃ヲ抜キ数人ヲ斬ル。遂ニ官軍隊俉乱ル退キ走ル。」

「此戦廿三日申ヨリ廿五日已ニ至ル。大小銃炮耳ニ不絶蝦夷陸軍ノ戦ヒ最モ烈布事此ニ過ルナシ。」

「（※四月二十八日、陸海両面での敗色を見て）然ルニ官間道ノ両軍相距一里余隙ヲ伺ヒ奇ヲ出ト欲スルニ本道敗ル。官軍挾攻ヲ患退ケハ則チ躡来ルヲ畏ル。充太郎伝習士官隊ヲ率テ斥候ト為シ、衝鋒隊ヲ中軍ニ備エ伝習歩兵隊ヲ後陣トス。総督自カラ令ヲ下シ、粛ゝ烈ヲ成シテ営ヲ抜テ五稜郭ニ入ル。」

『函館戦記』（大野右仲、新選組）

「二股（俣）の戦争」

　「官軍は両道より進む。一は則ち海に沿ひて松前の福山本道を進み、一は則ち稲倉石の間道を歴て五稜郭を衝く。陸軍奉行土方歳三間道総督に任ぜられ、吾と同僚大島寅雄とこれに随ふ。四月九日五稜郭を発し、市渡村に泊まる。日暮れて杯を傾けて戦陣の事を談ずるに、総督曰く、『我が兵は限り有るも、官軍は限り無し。一旦の勝ち有りと雖も、その終には必ず敗れんこと、鄙夫すらこれを知れり。然るに吾れ任せられて敗れなば則ち武夫の恥なり。身を以てこれに殉ずるのみ。』と。吾ら二人曰く、『もとより言を待たず。』と。」

「その翌十日、二俣《地名　市渡村を距ること三里》に至る。騎兵、官軍すでに稲倉石の険《騎兵司の報告及び斥候　稲倉石は地名　二俣を距ること五里》に寄するを報ず。ここにおいて、軍を二俣に駐む。ただ一茅屋有るのみにて、諸隊皆幕を谿間に張りて居す。」

　「その地形を相するに、屈曲して道は狭く、山は左右より擁し、右巓の登れば、則ち樹木茂れり。俯して臨めば、峭崖削るが如く攀るべからず。左巓に旁ひて下れば、河有りて流る。水深く歩渉し難く、寡を以て衆に敵すべく、真の天険なり。胸壁十六を築く。山巓と半腹とに築くものは十一。河岸に築くもの三。広くして大なるもの二。道を挟んで築き、昼夜督役せしかば二日にして成る。かつ三壁を天狗岩（岳）《天狗岩（岳）は地名　二俣を距ること一里余》に築き、一小隊を以てこれを守り、官軍の動静を伺はす。」

「十三日、日はすでに未。天狗岩（岳）の守兵官軍のまさに来襲せんとするを報ず。時に総督は市渡村に於いて休み、寅雄は五稜郭に至りて、二俣には吾独り在るのみ。騎兵を市渡村に馳せて以て総督に告げ、伝習歩兵隊をして右の山の諸壁を守らしめ、衝鋒隊をして左の山と河岸とを守らしむ。」

「部署すでに定まるも、天狗岩（岳）敗れ、官軍は勝ちに乗じ臼砲を放ちて来たるに、吾は壁を閉じて怯を示せば、官軍仰ぎて進む。諸壁皆銃を放てば、その騎して先んずる者、弾に中たり落馬して斃れしかば、我に謀有らんと疑ひ、退きて前の嶺に屯し、或るときは薄りて戦ひ、或るときは緩めて銃を放つ。近づけば則ち相距たること二百歩、遠くも五百歩を過ぎず。馳驟すること風雨の如き者は長藩たるを知り、剽悍にして死を畏れざる者は薩藩たるを知る。」

「我が壁は多くして兵少なければ、その攻むる所に従ひて禦ぎ、東集西散して瞬時も休むこと無し。ただ河岸の三壁のみは精鋭の卒を伏せて動ぜず。日没し、天俄かに暗黒にして、雨沃ぐが如く、戦卒皆戎衣を脱ぎ、弾薬箱を蒙ふも、雷管湿りて発せず、懐にしてこれを温む。傭夫砲声を聞き、戦慄して逃ぐ。吾等自ら酒樽を担ひて諸壁に贈り、雨中の艱苦を慰む。然れども、酔に乗じて軍律を侵すを患ひ、ただ人に一椀を与ふるのみなり。」

　「吾れ衝鋒隊の戦卒に謂ひて曰く、『客歳、越後の戦いに出兵するもの凡そ十余藩、兵五千を過ぎしも、その強勇なるは桑名を以て魁と為す。汝等と会津藩佐川官兵衛の部卒とそのいずれか優れるを知らず。然れども彼の二藩の如きはもとよりの士人にして、汝等は歩卒にして強勇なることかくの如し。吾れ常に賞嘆す。かつ汝等戦ふこと幾許なるや。』と。曰く、『五十回を下らず。』と。

「曰く、『汝等さきに牧野駿州治下の妙見山に在りて、風雨を侵して奮戦すること五日夜、その烈しくして久しきこと、奥羽越の戦ひも此れに過ぐること無し。今日の戦ひの如きは、汝等よりこれを見れば、児戯なるのみ。努力せば総督必ず重賞を賜はらん。』と。」

「皆喜び笑ひて曰く、『患ふ所は、薩長二藩と口中の虱を余すのみ。』と。又、伝習歩兵隊に謂ひて曰く、『蝦夷の諸隊の兵を練ること汝等の如き者無し。惰有りて怯なる者は他隊これを笑ふ。吾れ総督に白して重賞を与へん。』と。二隊憤激して自ら励む。」

「官軍数方よりこれを攻め、我れ随ひてこれを禦ぐ。ここにおいて谿に潜みて左し、河に沿ひて下り、横より我が営の河岸の三壁を撃たんと欲し、銃を放てるも、始めて我の備へ有るを知りて驚く。夜はまさに五更ならんとするも、官軍撓む色無く、我が兵すでに疲れたり。総督曰く、『官軍は士にして衆く、我は歩卒にして寡し。謀を以て勝つべくも、力を以ては争ひ難きなり。』と。」

「吾と総督と議り、金を懸けて死卒二十五人を募り、水を游ぎて河を渉り、険を越えて官軍の背を襲はしむ。すでにして河を渉るも、いまだ険に及ばざるに東方すでに明みて、官軍は退き、我が軍半里を躡（追）進せるのみ。」

「この戦ひや、官軍凡そ四百人、薩長の二藩その半を居（占）む。我は衝鋒二小隊、伝習歩兵一小隊にして、僅かに百三十人なるも、然も能く禦ぎてこれを退くるは、独り地の険なるのみにあらず、総督の法令厳整にしてよく士卒の心を得たるを以てなり。」

「官軍はなほ天狗岩に陣し、進撃の勢有るが如し。五稜郭の本営吾等が方面の急なるを聞き、伝習歩兵二小隊をして来たらしめ、先に在りし者と合わせて五小隊と為す。一小隊をして二股の諸壁を守らしむ。二小隊は麓の営に備へ、常に市渡村にて休む者もまた一小隊なり。川汲沢は市渡村と二俣との半途に在り。山樹鬱蒼として谿水清涼たり。茅を以て一屋を結び、仙居の如し。険嶺を越えて稲倉石に進出する古間道有るも人蹤絶えて五十年、官軍も畏れて土人を以て嚮導と為し軽装して来たるも、木を伐り道を塞ぐこと一里、過ぐ能はざらしむ。然も一小隊をして守らしめし者は戒めて虞れず。かつ二俣の諸隊の反顧の心を安んずるなり。吾は衝鋒隊指図役頭取酒井兼三郎とともに諸壁の兵を労り、首を回して官軍の営を望むに、夕日西に映じて炊煙騰上す。」

「兼三郎曰く、『来たり侵すこと無きを得んか。』と。言い、まだ終わらざるに、官軍前嶺に登り、忽ち現れ忽ち隠れ、樹木の間を馳驟して銃を放つ。然れども敢へて進まず、兵もまた多からず。我が伝習歩兵隊長大川正二郎は右の山と道傍の兵とを管し、寅雄は左の山と河岸の兵とを管せり。《衝鋒隊長二俣に来たらざるを以て寅雄これを管す》吾は独り総督の側に在り諸軍に伝令す。夜闌にして官軍漸く増し、五更に至りて八百人を下らず。川汲沢を守る者も市渡村に休む者も皆来援するも三分の一にも足らず、我が軍酷困す。けだし官軍は兵の寡きを示して怯じさせ、我が戦労を待ちて此れを敗らんと欲するなり。我れその巧戦なるを感ず。」

「詰旦、伝習士官隊長滝川光（充）太郎戦ひ急なるを聞き、二小隊を率ゐて自ら函館より馳せ来たる。直ちに嶺に登りて望みて曰く、『敵を見るに進まず。豈勇と曰はんや。』と。馬に鞭うちて先んず。その隊皆刃を抜きてこれに随ふ。山下の官軍敗るるも山嶺より銃を放つこと雨の如く、光（充）太郎仰ぐ能はずして退走す。時に一歩卒有り、身を躍らせて後に随ひ、剣銃を揮ひて数人を倒して死す。官軍目を抉り面を剥ぎ谿間に投ず。見る者正視するに忍びず。「正二郎面色怒りて光（充）太郎に謂ひて曰く、『君なんぞ策無きか。徒に殺傷されて軍気を摧くのみ。総督の令有るか、抑これ無きか。』と。光（充）太郎黙して答へず。その心悔やむものの如し。」

「吾れ正二郎に謂ひて曰く、『ただ官軍の我が歩卒を謾りて銃を捨て刀闘せんとするを畏るるのみ。滝川子（氏）の為す所は、また壮士有るを示すに足る。願はくは君譴むること勿れ。』と。総督曰く、『大川子（氏）の言もとより理有り、滝川子（氏）の勇もまた感ずべきなり。』と。」

「営の傍ら河を隔てて険山有り、日中官軍その陰に登り、煙りを挙げて喇叭を吹く。声は波浪の激するが如く、前嶺の官軍また頻りに放銃して挟攻の勢を成す。我が軍恐れを色す。」

「吾れ総督の命を奉じ、山嶺を陟降して諸営を戒めて曰く、『官軍後ろを絶たば必ず潜行せん。今煙りを挙げ喇叭を吹くは我をして懼れて走らしめんと欲するなり。諸子駭くこと勿れ。かつ総督の令有り。退く者は斬る。』と。衆心安んず。官軍また謀の成らざるを知りて止む。日没に及ぶまで、戦ひいよいよ烈しく、我が軍鋒を摧き刃冒すと雖も、官軍また能く軍し、潜進して壁下に薄る。我が軍しばしば危ふし。天まさに明けんとし官軍も憊れて退く。」

「この戦ひや、二十三日申より二十五日丑に至るまで、大小の銃砲絶えず。薩長二藩の強兵にあらずんば、豈能くこれを為すを得んや。我が軍死を決して戦ふにあらずんば、豈禦ぎてこれを退くるを得んや。蝦夷の陸軍の戦ひ此れを以て最も烈しと為す。」

「両陣隔たること一里余、軍を按じて動かず。隙を伺ひ奇に出でんと欲するも、二十八日、本道敗れ、官軍すでに有川村に陣して、まさに市渡村を侵さんとす。退かずんば則ち官軍の挟攻を患はんし、退かば則ち躡（追）ひ来たるを畏る。声言して成敗を天に付し、官軍の営を襲はんと日暮を待てり。光（充）太郎伝習士官隊を率ゐて斥候と為り、寅雄監す。衝鋒隊を中軍に備へ総督自ら令を下し、殿は則ち正二郎伝習歩兵隊率ゐて、吾れ監す。粛々として列を成し、営を抜きて去る。」

『立川主税戦争日記』（立川主税、新選組）

「敵又々十二日江差ヨリ上陸ノ敵軍新道ヲ進来テ二股侵ス、我軍土方総督トシテ伝習隊二百騎ヲ曳テ　　険地ニ壁ヲ築キ泰然トシテ守ル、敵銃ヲ尽シテ襲ト云ヘドモ我軍地理ヲ得タル故ニ敵タダ死傷ノミ有リ進ム不能。此時烈戦三昼夜也、明ニ至テ提力奮戦ニテ敵大敗軍。四月十三日ヨリ五月朔日マデノ戦ニ一度モ敗レナシ、幕下業恐総督ノ智勇ヲ、同日有川村瓦解ニ至リ軍ヲ退クニ敵其厳整ナルヲ望ミ敢テ尾セス、故ニ一人モ損ゼサルハ総督之力也。」

『維新戦争実録』（大正６）所収「函館役」（児玉恕忠、長州藩士→新政府陸軍）

「（前略）…軍艦の護送にて四月の八日に青森湾を出発しまして、四月の九日に松前領の西の方に乙部といふ所があります、其乙部へ着しました。」

「（前略）…それから乙部に上った所の上陸兵の内、私共（※長州兵）と福山の兵と津軽松前の兵これが山道の鶉村といふ所へ向つて分れて行きましたのが先刻申しました敵の抵抗した二股口であります、此の二股口を通行して大野村に参ることになる、此の乙部から江刺の間は三里であります、長州の兵が一個中隊乙部を守備の為に残されて居る様であります、それから江刺から二里程松前の方に参りますと國川村といふ所があります、それから其処に由堀村といふ所を経て木古内といふ所の間が間道であります、其間道へ向つて、福山、津軽、松前、長州の兵四個中隊が参りました、此の間道は松前の城下口と二股口の中間になります、二股口、木古内口、松前口と丁度三つに分れて函館の方へ行く勘定になります、此の木古内口それから二股口はどうも非常な困難な道で、平素通り人通りも無いといふ様な隘路で、新に道を開いて軍隊が行進するといふ様な有様で、数十里の間に人家が一つも無い、兵は皆露営をした、此頃は四月の十日になって居りますから幾分か季候も宜うございますが、それでも山の谷には大分雪があつて、此の雪を始終掻いて水の代りに用ひたことがあります、…（中略）…同日（※四月十一日）二股口へ行た長州の兵が稲倉市に前進しました、此時私が此処を廻って見ますと、最初に松前兵のやられた城跡の様な所を見まして通行しました、是より山奥にて稲倉市と申す所は山小屋が一軒あるきりで外に何もありませぬ、非常に嶮岨の山の間である。」

「（前略）…四月の十三日になりますと、此の二股口に私が居りましたが、其稲倉石といふ所の藁屋を出発して前進をしました、其時には道案内にアイノ人を四五人連れて居ります、これは矢張り弓箭を擔いで熊でも取るといふ様な支度をして先案内をしました、此の二股へ向つて参りますと、三箇所程台場が築てあります、今では塹壕と言つて、歩兵の築く小さな土手であります、此頃は台場と申した、其台場が三箇所程山の半腹に築いてありました、それはもう直に落ちて仕舞つて、さうして進んで行きますと、金山といふ所がありまして、下は川で上は大変高い所に台場が築いてございます、これは幕府が依然仏式の伝習をする時分に仏蘭西から教師を雇うた仏蘭西人が幕府に居りました、其仏蘭西の教師が二三人加はつて居た様であります、今日の防禦工事は陸軍でやるのは普通当然でありますが、其頃は外国人を雇ふて遣つた様であります、之に向つて金山の攻撃を致しましたが、何分堅固なる兵備で敵も能く守りました、夜十二時に至る迄やりましたが到底これが取れない、遂に夜半に至つて退却をすることになりました、雨は降し非常な困難で、糧食も来ない、昼飯を喰たきりで夜十二時迄何も食うことが出来ぬ、山の絶頂で怪我人が出来て、それを運搬するのに甚だ困りました、又方々に分れて前進をして居る者を集めるにそれを呼集めて密に敵に聞えぬ様に退かなければならぬ、それが為に方々山の間を歩いた為に身体が疲労して役に立ぬ、さうして山の上にある怪我人を連れて下へ下ろさねばならぬ、人家も何もない山でありますからそれを運ぶ者もない、仕方がないから両方の足を引張つて上からズリ落す、痛い〱といふ、誠に可哀さうだが仕方がない、稍々に引摺り下ろして、さうして各々舁いで運ぶといふ様な有様、誠に哀れ千万で稍々にして暗がりを引上げて稲倉市まで退却しました、これが十六時間の戦闘でございます、敵は三万五千発打て居ります、官軍の方の銃はスペンセル、スナイドルを打つて居ります。」

「其内日がズツと上つて来ます、私は途中でどうも疲れて動くことが出来ぬ、前の日に握飯を二つ食うたぎりで戦ひ詰めた為にどうしても腰が立たない、それで戦友の強い奴はドン〱帰るが、私は少し此処へ寝るから敵が襲撃しても首を取られても仕方がないからどうか先へ行つて呉れと言て途中へ寝たことがあります、迚も疲れて行かれぬ、一時間程寝ましたが、幸ひ敵も来ませぬ、それから目を覚して稲倉市迄帰つたことがあります、稲倉市といふのは、其藁屋が矢張り飯を炊いたり休養する所であります、それ迄戻らなければ何も食ふ物がない、アイノの奴が居りますけれども、これも其辺に居るのでなく、山奥に居る者が四五人組んで来て居る、それに食物の事を言ふこともできぬ、そこで藁屋まで戻つてドン〱炊出しをした様に覚えて居ります、此処で大分休息をして外の隊が又金山の攻撃に稲倉市から出て行つた、屡々行くけれどもどうしても金山が陥落しない、どうも度々稲倉市まで休養の為に戻らなければならぬので不便でいけませぬ、そこで後方線一里位の所で茅を切て掘立の家を拵へて其処に這入つて休んで居た、どうも驚いたのは、其頃に蕗がありましたが、大変大きな蕗で、蕗の葉が殆ど笠になつて居つて、雨の降る日は笠の代りにしたといふ様なことがあつた、山の蔭で始終雨が降る、どうも兵力が少い為に殆ど毎晩敵の正面に出て能く警戒をして居らねばならぬ、所が其頃は十五六の子供も矢張り兵隊になつて居りましたから、さういふのが矢張り混つて居る、それで夜襲を受けてはいかぬから前方に五六人宛止つて居る、先に又二人位宛道に張番をして居るといふ有様であります、それで敵の篝火を焚くのも見えて居る、話聲がするのも分るといふ所迄行て居りました、実に困つたことは、雨の晩は暗くて見えぬ、下は大川水音がゴウ〱する、敵が進んで来ても少しも足音を聞くことが出来ぬ、水音で分らぬ為に、銃に剣を附けて雨の降るのに道の真ン中へ座つて居る、銃剣の先へ当つたら打つといふ様な風にして居る、子供等は暗くてどうしやうかと言て心配して居たことが居ります、夜は一番これが困難で、後とから交代に来るといふのも時計もなし、大凡そで来るが、後方から来たのが暗いので、応答も何もせぬで、肩を叩いてどうかと言ふから、銃に剣を付けて、斯ういふ風に打金を揚げて、剣の先に人が当たれば敵と見るから打出すといふ様な風で譲渡をするといふ様な風であります、二股口の金山の台場はトウ〱陥落いたしませぬ、其内に品川弥次郎さんが松前口から心配して来られて、どうも此の方面は六ヶしいさうだといふので品川さんが来て大分応援があつた様であります、…（後略）」

「（前略）…今度は二股口になります、二股口の金山の戦争が二十三日に総攻撃をやりましたけれども、中々金山は落ちませぬ、此日は非常な激戦で遂に此時に援軍に早く出ろといふ使が来た為に私の中隊は早く出掛けました、丁度敗れた時に我が官軍の監軍をして居た駒井政五郎といふ人以下十名補ほど戦死をしましたが、これは敗れた為に山の間から四五人の兵を連れて、官軍は退却をしてはいかぬと言て飛出した、それが為に山から四五人出て非常に大きな聲をした為に敵も大群が此の山から出て来たと思つて敵もそこで躊躇するといふことになりました、駒井政五郎といふ人に私共出る所で遇ひました、何処か怪我をなされたかと言たら、ナニ僅かな怪我だよ、一刻も早く出て盛り返して呉れなければいかぬ、此方は負けたから早く行けと言はれたが、それから間も無く駒井政五郎といふ人は戦死したさうでありますが、中々若手で強かつた、此時出て見ると、戦前に居つて弾薬箱に腰を掛けて頻に指揮をして居る人があります、あの人は元気の良い人だ強いなアと言ひました、何処の人やら分らぬ、それから後にあれは何処の隊長であらうかと言て聞きましたら備前の岡山の隊長で杉山岩三郎といふ人であつたといふことで我々兵隊が其場で其名を知りました、これは大分劇しい所で厳重にやつて居られた様であります、これで稍々敵を元の台場へ押込んだ丈けのことで、別に敵の戦線を陥落するといふ訳にいかない、これで又対して居るだけのことになりました。」

「（前略）…それから五月の一日、二股口を守備する所の敵の兵が二十九日に、矢不来の敗北を聞いて、退路を絶れんことを恐れて、二股の守備を棄て、五稜郭に退走した、同日に二股口にある所の官軍の諸隊は、大野村を経て七重村に向つて進軍した…（後略）」

『維新戦争実録』（大正６）所収「函館方面の一部分に就て」（梅地庸之丞、徳山藩・献功隊）

「…そこで弥々四月六日に前軍が青森を発して九日に蝦夷地の乙部村を衝き進んで江差を取つて官軍の根拠地として兵を四道即ち松前口、木古内口、二股口、モルラン口から進むことになつて…」

「四月十四日に青森の後軍が江差に渡り献功隊は二股口に進むことになつた…（中略）…二十四日献功隊は二股口で戦ったこれが献功隊の初陣であった…」

『戦争御届書』（松前修広）

（乙部上陸後、軍を分ける前にも「御軍監駒井政五郎殿ヨリ令有…」等の記述があり、駒井の軍監としての差配ぶりの一端が伺える）

「一、四月十日暁敝藩一小隊ハ山道大留村一小隊半幷ニ大砲一門海浜松前口一小隊半ハ木間内口ヘ出兵被仰付明ケ六字…木間内口ヘハ一番小半隊二番厚谷清隊ヘ総長松前右京軍事方松崎多門差添出発…」

「一、木間内口ヘ出兵一中隊ノ内、九日鶉村ヘ宿陣ノ小半隊ハ館村ヘ出進、十日江差出発ノ一小隊ハ十二日稲倉石ヘ著ノ処、翌十三日上二股ヘ出兵被仰付候処、賊稲倉石ヨリ四里半程向キ天狗嶽ト申所ヨリ八九町隔三枚嶽ト申山半腹ニ陣屋ヲ構ヒ罷在候ニ付、長州福山藩幷ニ敝藩一小隊半相進ミ候。否賊戦ヲ挑ミ屢発砲致シ候間諸隊ヨリ応発激戦ニ及ヒ候処、長州兵隊賊軍ノ後ロ山手ヨリ掩襲ニ依テ賊狼狽一里半程向ニ二股ノ方ヘ逃去直ニ尾撃ノ処、賊下二股山手ニ大砲備置厳重防禦ニ付長州福山敝藩ノ兵隊夫々分配攻撃、翌十四日七字ニ至ルマテ劇戦仕候処、一先稲倉石ヘ揚取ノ御下知有之、仝所ヘ帰陣ノ趣軍事方今井晦輔ヨリ総長松前右京マテ急報有之」

「一、稲倉石滞陣敝藩一中隊ノ内、四月二十四日下二股ヘ一小隊出兵ノ儀御達ニ付、朝六字出発。先日ノ戦場ニ繰入山ノ中段ニ撒兵ヲ挑ミ薩州福山津軽ノ兵隊ト合シ昼二字ヨリ戦争夜十二字ニ及ヒ追々兵士相疲レ一旦揚取候様御下知ニ因テ二十五日暁三字天狗嶽ヘ帰陣ノ趣軍事方尾山徹三ヨリ総長松前右京迄急報有之」

「一、木間内口出兵一番二番ノ両隊下二股ニ於テ両度苦戦ノ後仝所賊ノ番兵所ニ相対候。高山絶頂ニ於テ番兵可仕旨御下知有之則天狗嶽ヲ発シ右ノ山嶺ヘ転陣警備ノ処、四月晦日夜中賊徒重壘ヲ棄奔竄ノ趣、翌朔日夕方報知有之否尾撃シテ遂ニ五月二日早朝大野村続本郷ヘ著所々番兵巡邏等相勤五月廿日御下知ニ付函館表ヘ繰入申候」

「一、戦争中死傷左之通

　（中略）

　四月十三日木間内下二股ニ於テ

　　　　　　　　　　　　　　　　一中隊

　　　　　　　　　　　　　　　　軍事方

　　　　　　　　　　　　重症　　　　　松　崎　多　門

　　　　　　　　　　　　　　　　一番隊

　　　　　　　　　　　　　　　　　銃卒

　　　　　　　　　　　　傷　　　　　　笹　村　貫　一

　　　　　　　　　　　　　　　　二番隊

　　　　　　　　　　　　戦死　　　　　河　合　廉太郎

　　　　　　　　　　　　重症　　　　　平　沼　寅太郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　銃卒

　　　　　　　　　　　　同　　　　　　小　林　芳　蔵

　（中略）

　四月廿四日木間内下二股ニ於テ

　　　　　　　　　　　　　　　　一番隊

　　　　　　　　　　　　　　　　　銃士

　　　　　　　　　　　　傷　　　　　　蛎　崎　甚五郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　銃卒

　　　　　　　　　　　　戦死　　　　　八木橋駒右衛門

　　　　　　　　　　　　重症　　　　　高　橋　直五郎

　　　　　　　　　　　　傷　　　　　　佐　藤　直太郎」

『防長回天史』（大正10 / 1921年　末松謙澄（伊藤博文の婿）編、長州視点かつ客観的な幕末維新史）

「…山田市之允海陸軍ヲ率ヰ青森ヲ発ス風濤可ナラズ平館ニ一時寄港シ八日午前乙部村海岸ニ着ス陸兵ハ豊安ヤンシー號オーサカ號及ビ若干ノ和船ニ分乗シ山田ハヤンシー號ニ乗レリ」

「按ズルニ山田ノ率ヰシ第一軍諸藩隊ハ参謀達ニ依レハ長州三百人弘前三百人福山三百人松前四百人大野百人徳山百人トアリ此諸藩兵上陸後ノ部署左ノ如シ大体ハ此部署ヲ実行セリ

　（中略）

　厚澤邊口（即チ二股口）

松前兵二百人　長州兵百人

弘前兵百人　　福山兵百人

　輜重要護兼熊石邊探索

福山兵百人　　弘前兵百人

　豫備兵

長州兵百人　　徳山兵百人

砲兵砲六門」

「右ニ謂フ所ノ…（中略）…厚澤邊口ハ鶉村稲倉石金山ヲ経テ箱館附近ナル大野ニ出ル間道ナリ即チ前ニ五稜郭ヨリ箱館賊兵ノ捷路ニ由リ館城ニ向ヒシ間道ナリ別ニ松前口小堀ヨリ左ニ分岐シ山野ヲ横断シテ木古内ニ出テ海岸本道ニ合スル間道アリ官軍ノ一部ハ此間道ヲ進ミタリ此等二間道トモ當時蝦夷地内部ハ開拓未ダ行ハレス殆ント道ト稱スヘカラサル嶮隘ノ狭路ニシテ数十里間家モナク木古内間道ハ殊ニ甚シク賊兵樹木ヲ伐倒シテ道ヲ塞ケル所モアリ官軍ハ荊棘ヲ斫開シ或ハ新ニ架橋シ或ハ倒木ヲ除キ行進シ多ク露営シタル状況ニシテ甚ダ困難ヲ極メタルコト諸文書ニ見ユ」

「九日官軍ノ乙部ニ上陸スルヤ…（中略）…二股口亦官軍鶉村ニ入ル（後略）」

「同日（※四月十二日）二股口ノ官軍整武第二第三中隊第二砲半隊松前兵福山兵二股ニ進ミ二股ヨリ二里餘賊ノ三壘ヲ奪フ福山記録ニ曰ク長兵同進発砲激戦稍死傷アリ長藩別ニ挺進セルモノ賊ノ背後山上ヨリ襲撃ス賊壘ヲ空クシテ走ルト松前記録ニモ同趣旨見ユ官軍進撃一里餘ニシテ賊ノ大臺場ニ接觸ス守備極メテ嚴ナリ即チ金山ノ壘ナリ児玉如忠実歴談ニ金山ハ一方川アリ一方ハ高山ナリトアリ而シテ此邊ノ敵ノ防禦工事ハ佛人ノ指揮ニ成ルモノトセリ蓋シ眞ナリ官軍力攻遂ニ抜クコト能ハズ激戦終夜十四日遂ニ稲倉石二退ク此邊ノ地形及ビ防禦工事ニ付テハ前巻箱館戦争章（六五一頁）ヲ参照スベシ（※該当箇所、『説夢録』における稲倉石付近の描写）」

「按ズルニ此日ノ戦實ニ惨烈ヲ極メタリ麥叢録ニ依ルニ午後三時頃敵兵約六百来リ進ム我兵嶮ニ拠リ胸壁十六ヶ所ヲ構ヘ壁ニ拠リ乱発ス自他共ニ兵ヲ繰替ヘ翌朝七時過ニ至ル十六字間ノ戦争敵遂ニ退ク我兵ノ費ス所ノ弾薬殆ント三萬五千発トアリ佛人「ホルタン」戦地ヨリノ書翰ニモ十六時間ノ戦争今朝六時敵勢立退クトアリ陸軍参謀報知書ニ終夜攻撃遂ニ落チズトアリ松前記録ニモ翌十四日七字迄激戦トアリ大體同シ」

「昨日来大雨渓水漲溢兵士進退最モ労ス既ニシテ諸兵再ビ進ミ中二股ニ至リ壘ヲ築キ賊ト相對ス賊兵敢テ来リ侵サズト雖トモ我亦未ダ之ヲ破ルヲ得ズ姑ク對峙ス福山記録ニ曰ク彼亦自保シ猥ニ自出セズ官軍近堺ニ小堡ヲ築キ更番戍守シ漸ヲ以テ逼ルノ策ニ決スト」

「（前略）…昨十五日青森ヲ発シタル第三軍此日江差ニ着ス乃チ之ヲ分チテ木古内松前二股ノ三口ニ増発シ別ニ新ニ安野呂口ヲ加ヘ一部ヲ派遣ス是ニ於テ官軍ノ進路四口トナレリ」

「按ズルニ此分遣兵ノ區別稍明確ヲ欠クモ諸書ニ依ルニ略次ノ如シ…（中略）…二股口ニ長陸軍参謀報告ニ長州砲二門鶉村トアルニ依ル戊巳征戦記略ニハ第二砲半隊安野呂口ニ進トアルモ是レ疑ハシ松前記録ニモ安野呂口ニハ松前福山備前弘前四藩兵進向ノ事見ユ薩州一中隊陸軍参謀報告ニ依ル薩藩記録ニ三番兵具隊トアリ徳山一中隊水戸一中隊水戸兵ハ二十四日ニ至リ命セラル二股口分遣ノ諸藩隊ハ先ツ鶉村進向ヲ命セラレタリ…（後略）」

「此時ニ當リ二股口ニテハ此月二十三日將ニ日ヲ期シテ大ニ下二股ナル金山ノ賊壘ヲ進撃セント會〱同日斥候兵ノ衝突ヨリ事起リ諸藩兵直チニ出動シ大戦争トナリ弘前記録ニ曰ク江差表ヨリ山道二股口ニ進軍ノ各藩兵隊四月二十三日末ノ二股迄繰込尤明二十四日払暁ヨリ合戦相始旨会議所ヨリ御達有之官軍ノ斥候山中捜索ノ處賊ヨリ頻ニ発砲ニ及ヒ候間遂ニ諸藩繰出左右山手ニ布列砲戦に及フ賊五箇處ヘ要害ヲ構ヘ嚴敷防戦云々トアリ翌二十四日松前兵薩摩兵モ来リ加ハリ松前記録ニ曰ク稲倉石滞陣弊藩一中隊ノ内四月二十四日下二股ヘ一小隊出兵ノ御用達ニ付朝六時出発先日ノ戦場ヘ繰込云々トアリ薩藩記録ニ依ルニ三番兵具隊加治木砲隊左半隊モ同二十四日朝六字鶉村発軍二股ヘ繰込メリ更ニ終日終夜ノ激戦トナリ我第二第三中隊第ニ砲隊等諸藩兵ト共ニ悪戦苦闘シ賊ノ四壘ヲ抜キシモ遂ニ克ツコト能ハズ二十五日暁天ニ至リ兵ヲ収メテ原位置ニ復ス此戦實ニ一晝一夜ニ渉ル二十三日黄昏ヨリ二十五日朝迄連戦ノ事官賊雙方ノ文書符号ス彼我死傷頗ル多シ監軍駒井政五郎長藩殊ニ奮戦シテ之ニ死セリ

　按ズルニ此時ノ戦況竝駒井勇戦ノ状反テ脱走幕人ノ諸書ニ詳ナリ麥叢録ノ叙述左ノ如シ但シ彼我ノ死傷数ノ如キハ信ジ難シ

　四月二十三日敵敢死ノ兵ヲ選テ又二股ヲ攻ム我兵前ノ如ク壁ニ拠リ之ト戦フ敵更ニ兵ヲ繰替テ頻ニ進ム我兵死ヲ以テ是ヲ守ル不進不退鬨聲山谷ニ響キテ打違フ弾疾風ノ花ヲ散ラスニ似タリ五稜郭ヨリハ瀧川充太郎原註頭並二小隊ヲ率ヰ応援ノ為メ出張此戦争二十三日ヨリ二十五日朝迄ノ連戦ニテ大隊有餘ノ兵各千発ニ近キ発砲故ニ銃暖ヲ生シテ持能ハズ之ニ因テ各〱桶ヘ水ヲ入貯ヘ置三五発ニシテ筒ヲ冷シ代リ代リニ弾ヲ込此ノ如クナスコト晝夜毫モ間断ナク奮戦我兵怒テ一中隊餘リ原註瀧川充太郎隊壁ヲ躍リ越テ敵陣ニ衝入シニ彼レ是勢ニ屈シテ山路ヲ引退ク我兵氣ヲ得テ頻リニ進ミシニ敵ノ軍監某原註姓名ヲ佚ス僅二三人ヲ従ヘテ山上ヨリ打テ出テ馳セ来リシ勢ニ敵ノ大兵又返来ルニヨリ我是ニ氣ヲ奪ハレ退ントセシニ亂丸ノ為ニ殪サルル者数人漸ニ踏止リ血戦彼軍監ヲ殪セリ原註此人二十二三歳位ニシテ尤可惜人ナリ可恨其姓名ヲ失ス敵遂ニ破ルベカラザルヲ知リ引退ク此役敵ノ死傷数百人我兵死傷三十人ニ不満敵又此道ヘ出デス

　右ニ云フ軍監某ハ即チ駒井政五郎ナルコト疑ヒナシ山口縣忠節事蹟ノ要ニ依ルニ政五郎忠仲人トナリ温厚沈實好テ書史ヲ讀ム夙ニ軍務ニ從フ慶応元年御楯隊隊長トナル四境ノ戦芸州口ニ力戦ス御楯隊鴻城軍ト合併整武隊トナルヤ其軍監トナル明治元年春初中国邊ノ軍ニ從ヒ伊予松山城ヲ攻ム同年山田市之允ニ從ヒ秋田ニ赴キ箱館進勦ノ事アルニ及ビ清水谷総督擢テ監軍トナス遂ニ金山ノ役ニ戦死ス年二十九」

「二股口ニ於テハ前月二十九日深更賊兵金山ノ守ヲ棄テ奔逃ス蓋シ有川方面ノ賊報ヲ聞キ後路ヲ断タレンコトヲ恐レ五稜郭方面ニ走リシナリ官軍之ヲ暁リ直チニ追撃シ一ノ渡七重大野等ニ進ム」

以下、『復古記』よりの子引き

『戊巳征戦記略』（長州藩）

「四月十日、山海両道進軍、海道ノ福山等四中隊、分テ小堀ヨリ木古内越ニ進ム、木古内、鶉村等、山路嶮隘通スヘカラス、新ニ荊棘ヲ斫開シテ進ム、十数里間人家ナシ、兵士皆露宿ス、其艱苦言ヘカラス。十一日、第三中隊鶉村ニ至ル、第二半砲隊稲倉石ニ進ム。」

「四月十二日、第三中隊稲倉石ニ進ム」

「四月十三日、第二、第三中隊、第二砲半隊、福山、松前藩ト中二股ノ賊壘三所ヲ撃破シ、進テ金山ノ砲臺ヲ攻ム、壘極テ堅ク、賊能ク拒ク、絡宵攻撃抜コト能ハス、傷五人、兵士松原啓助、後遂ニ死ス、川口富槌、高橋教三、藤野九郎、桧垣友之進、十四日、稲倉口ニ退ク、昨日来大雨、渓水漲溢、兵士進退尤労ス、後又中二股ニ進ミ、賊と對壘ス。」

「四月廿三日夕、第二、第三中隊、第二砲隊等、再ヒ中二股金山ノ賊壘ヲ攻ム、衝撃翌日夜半ニ至ル、終ニ抜ケス、死二人監官駒井政五郎、兵士岡村源太郎、、傷八人兵士森永小四郎、湯原荘作、長松登人以上三人、後遂ニ死ス、松原彦内、和田小太郎、鶴永勝太郎、樋口数馬、甲田次郎、」

『山口藩忠節事蹟』（長州藩）

「駒井政五郎、姓ハ藤原、名ハ忠仲、人ト為リ温厚沈實、好テ書史ヲ讀ム、文久三年癸亥六月、萩城海寇防禦大砲掛ト為ル、尋テ上京シ、秋國ニ帰リ、八幡隊ニ編ス、黨議ノ起ルヤ、御楯隊ニ入リ、騎馬斥候ト為ル、明治元年戊辰正月九日、備後福山ヲ討シ、播磨、但馬ヲ徇フ、遂ニ四條総督ニ從ヒ、伊予松山ニ問罪ス、是冬、北海ノ役ニ從ヒ、十一月廿三日、青森ヲ発シ、航シテ東京ニ上リ、奏請スル所アリ、明治二年己巳三月、青森ニ還ル、清水谷総督、擢テ、監軍ト為ス、四月廿三日、第二、第三中隊、第二砲隊等、中二股、金山ノ賊壘ヲ攻ム、忠仲戦死ス、年二十九、朝廷祭祀料永世五十石ヲ賜フ。」

『岡山藩記』（岡山藩）

「十四日、當藩一中隊、鶉村ヘ致出張候様御達ニ付、同晩四時、江差表雷発、館村守衛致シ居申候處、疑敷者参候旨、土民ヨリ注進ニ付、巡邏ノ者罷越、早速召捕糺問致候處、賊之間諜ニ紛レ無御座候ニ付、同十七日、鶉村会議所ヘ差出申候。」

「四月廿三日、中二股ヘ繰込、臺場四ヶ所ニ築造相成相当候ニ付、精鋭隊一小隊ニテ持固メ、同晩五字、福山藩ト間道ニ出没致シ、挟撃之勢有之、賊鋒不容易ニ付、夜八字比、猶九番隊一小隊繰出シ、正面之兵ト併合、先隊同様徹夜攻撃、翌二十四日八字迄激戦致シ候ニ付、福山藩ト交代、一ト先休憩致候様、参謀衆指図ニ付、一同引揚、兵糧相用候折柄、賊徒頻ニ、発砲、抜刀ニテ相迫候ニ付、右交代之兵引色有之、依之、直ニ進撃、抜刀奮戦、賊遂ニ潰走、其後十字比、賊、渓間ヲ回リ、後ヲ絶之勢ニ付、迅速発向之處、賊徒盡鋭来侵、我兵殆及苦戦候得共、決死奮闘、遂ニ討散シ、尚又正面ニ向ヒ、薩、長ト併合攻撃致シ候得共、地勢嶮岨、進撃難仕、切歯持場ヘ引揚、徳山藩ト併合、同夕二字迄発砲勉励打挫候中、御達ニ付、中二股迄一同引揚申候、右二十三日晩ヨリ、一日二夜無寸隙戦争中、死二人、精鋭隊隊長岩田七郎兵衛、同隊士可児川幾三郎、傷十四人。精鋭隊士井上安之進、西村常次、二人後遂ニ死ス、萩野梅太郎、入江兼太郎、安井坂次郎、楠原四方之介、九番小隊坪田安左衛門、日名政次郎、山田市右兵門、川勝左衛門、那須半兵衛、伊丹光蔵、杉山岩三郎、金馬八郎次、（蝦夷追討記所引、備前藩届書ニ拠レハ、川勝ハ山田ノ、伊丹ハ那須ノ、金馬ハ杉山ノ各々家来ナリ、即チ傷十一人ナリ十四人ニ非ラス、）

　同廿五日、上二股ヘ引揚候様御達ニ付、晩四字、同所著陣、其後五月朔日迄同所ニ野陣。」

『阿部正桓家譜』（福山藩）

「四月十三日、一番中隊砲隊二股ノ賊壘ヲ攻ム、長州、松前二藩ト同進発、礮劇戦稍死傷アル内、長藩別ニ挺進セル者、賊ノ背後山上ヨリ襲撃ス、賊壘ヲ空フシテ走ル、官兵追テ下二股ノ砲臺ニ至ル、此ノ砲臺山上ノ険悪ヲ占メ、二股諸砲臺中ノ最ナル者ナリ、三藩力ヲ極メ攻撃、勝利ナクシテ退ク、然レトモ彼レ亦自保シ、猥リニ四出セス、官軍近境ニ小堡ヲ築キ、更番戍守シ、漸ヲ以テ逼ルノ策ニ決ス、死一人、一番中隊兵士川崎克之助、傷二人。一番中隊兵士佐原宗太郎、吉田弼、」

「廿三日、偶賊ノ斥候ト交砲セシヨリ起リ、則夜薩州、備前、松前等各出兵、我藩三番中隊砲隊ハ軍監山岡運八引率シ、相共ニ進撃、一番中隊右翼小隊ハ軍監關新五右衛門纏テ、右側山上ヨリ横撃奮戦、翼廿四夜半ニ至ル、終始彼我攻守相對抗、勝敗決セス、乃チ各藩退テ、上二股ニ帰陣、而シテ番兵嚴前日ノ如シ、死二人、三番中隊兵士小田休之助、高橋茂、傷十二人。中村福之助、後遂ニ死ス、藤治源吾、斎藤彌兵衛、箱田七右衛門、浅見亦平、佐藤嘉右衛門、橋本長次郎、小島武三郎、柏原精一、鹽田幾衛、波多野誠之助、山上歓之助、」

『討北紀略』（弘前藩）

「四月十三日、我、司令士八木橋茂正、浅利某二兵隊、同長門兵、福山兵撃賊于二股、此地最絶嶮、賊拠其要扼、諸兵不能進、交番銃闘徹暁、其明浅利某陣山上、八木橋茂正進渓間、賊模造諸藩徽突出渓口、我兵驚愕退縮、茂正鼓勇回戦、兵皆振刀接闘、浅利某自山上撃賊後隊、賊遂走、此日、我重傷者七人、石山増三郎、手塚徳三郎、吉村悠也、岩淵徳之進、白取直之進、三浦次郎右衛門、平澤與吉、軽傷者三人。廣田平作、小友健三郎、林栄作、」

『津軽承昭家記』（弘前藩）

「江差表ヨリ山道二股口ヘ進軍之各藩兵隊、四月廿三日末之二股迄繰込、尤明廿四日払暁ヨリ合戦可相始旨、会議所ヨリ御達有之、官之斥候、山中捜索之處、賊ヨリ頻リニ発砲ニ及候間、遂ニ各藩繰出、左右山手ヘ布列砲戦ニ及、賊五ヶ所ヘ要害ヲ構、嚴シク防戦、即夜半十一字頃、弊藩米橋左太夫一小隊、福山藩ト代、浅利萬之助一小隊、長州藩ト致交換候様、会議所ヨリ御達有之ニ付、即刻左太夫ハ本道ヨリ、萬之助ハ左山手半腹ヘ登相迫候處、賊、四ヶ所之臺場ヨリ烈数発砲、翌廿四日迄、無間断砲戦、晝十字頃、賊、各藩之合章ヲ用ヒ、山手並渓間ヨリ凡百五十人計突出候ニ付、一旦披靡致候得共、暫時守返、復々烈戦砲発防戦、賊急ニ相迫、短兵接戦ニ及候處、薩、長後ヨリ応援、賊遂ニ潰亂、臺場ヘ逃籠、暫ク砲発、四字頃、左太夫、万之助引揚之御達有之、薩、長ト交替、薩、長兵隊烈シク砲戦、賊之臺場五ヶ所之内、四ヶ所迄乗取候得共、地勢不便、官軍一同、末二股迄引揚候ニ付、右四ヶ所ノ臺場、復々賊之有トナル、此戦、廿三日夜ヨリ廿四日、終日之苦戦、各藩兵隊疲労致候故、廿五日ヨリ休戦ニ相成候弊藩手負十人。八木橋左太夫手銃隊石山増三郎、手塚徳三郎、吉村悠彌、岩淵徳之進、廣田豊作、小友健三郎、浅利万之助手銃隊白取直之進、三浦次郎左衛門、平澤與吉、林栄作」

『薩州出軍戦状』（薩摩藩）

「四月十六日、江差上陸、…（中略）…三番兵具隊、加治木砲隊ハ鶉口ヘ向フ故、是ヨリ薩兵ハ二手ニ分ル、…（中略）…三番兵具隊、十七日、鶉口ヘ発軍滞陣ノ處、同廿三日夜、二股臺場ヘ賊徒襲来、合戦最中ノ段、出先斥候ヨリ報知有之候ニ付、同廿四日朝六字、鶉村発軍、二股ヘ十二字著、直ニ左半隊ハ山手右道ヲ相固、右半隊ハ正面ニ相懸、暁三字迄無絶間相戦、餘程敵地ニ相進居候得共、参謀衆ヨリ一往兵隊引揚候様致承知候ニ付、二股正面ノ臺場迄引揚、相固メ居申候、即死一人、津軽夫之彌之助、手負二人戦兵坂元與八、神田伸右衛門、

　廿五日朝六字比、賊小勢ニテ二股正面ノ臺場先ヘ相見得候ニ付、致砲撃、暫時相戦逃去申候。」

『太政官日誌』

「四月十三日、鶉村口進撃、二股迄進ミ、二股ヨリ二里餘臺場三ケ所乗取、此處ヨリ一里大臺場アリ、賊兵守備厳重ナリ、終夜攻撃遂ニ落ス、地勢守備不宜、暁天二股迄引揚。…

　　　五　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　陸軍　　参　　　謀」

「（前略）…四月十八日、…（中略）…薩州一中隊、徳山一中隊、備州一中隊、長州砲二門、鶉村口へ出張、…（中略）…廿四日、水戸一中隊、鶉村口へ出張。…

　　　五　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　陸軍　　参　　　謀」